



利根川圖志

ル 4
3221
2



門 3221
巻 2

山 勝

利根川圖志卷二

利根川上中連合

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

利根川の全流凡七十餘里その大小不因てこれを上中下の三に分つ即本源上野國利根郡藤原の奥より二十八里餘を経て渡良瀬川落合の處不至るこれまでを上利根川といふかくて武藏國葛飾郡栗橋御關所の前不至て官渡あり房川渡といふ川幅凡三里不以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ島川の東不權准ず此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并名起るせ江戸川とあり下總國葛飾郡堀江新田不至て海不入る北を赤堀川といふ長一里半許廣六十間より二百三十間不至る再分れて逆川と爲り平時ハ南して江戸川不落つ洪水の時ハ關宿の杭行して中利根川不落つ故不逆川の名ありこの三川の間二島を爲す合せて五ヶ村島と

利根川上中連合

昭和九年九月九日 購求

いふ佐伯川これを分つこの島始ハ五村あり一赤堀川の下即中
利根川凡十六里餘を經養養川落合の下不至て下利根川と爲る
古昔利根川の流ハ今の處からて尚南方に在りき今これを古利
根川といふ今の利根川上中連合の邊ハ古の下河邊庄櫻井卿あ
り古河より關宿邊までをいふ五ヶ村島の内江川中古鎌倉より奥
州不行むむしてこの邊を過ぎ事疑か上古の奥州道ハ木曾
か、り花輪澤入古峯原峠を越え終高原峠を經て奥州會津ふ
へりハさる事にてこの野鹿沼ある山口安良が押原推移録中巻ハ
道とハ固より異あり許多の人の經過せ一中遺物の有るハ
中田光了寺不藏せる静女舞衣あり静女ハこの邊なる下邊見よ
る由静女舞衣縁成氏朝臣の古河城不住一篠田氏の關宿不在り
起ふ見えたり街あるべ一道興准后の村君武州埼玉郡に上
村有阿佐間の地を經て古川中田郡山ふ來り多ひ更に鎌倉より
鳥喰を過ぎて佐野舟橋の方に行き多へるハ文明十八年の秋あ

りこの地後ハ北條家不屬せীগ天正十八年小田原落城の後
東照神君不歸一元和止戈の後この處官渡と爲れり當時下野以
北不行くに必由の要路あり

利根川在下總國俗說飲此水者令人 羅山先生

夷齊設使飲貪泉 義氣清風不可遷

唯有古今天性在 癡人猶守利根川

鳥喰 下總葛飾郡古河領の内鳥喰村あり日光山の道筋の少ト
西ふて古海道といふ以上廻國雜記標注上卷 渡良瀬川東岸の地あり廻國
雜記云鳥バミといへる所を過行きなる不日暮れ付り此ハ
さそハれて我もやどりふいそぐありうへるゆふの多喰の里 道興准后

茶屋新田 常總軍記卷一云下總古河と中田の間不茶屋村とい

古利根川圖



北

三

ふ處ありこの所ハ 將軍家日光 御社參ふも二町許の内
御駕籠不召させられず 御歩行の恒例あり昔古河公方の時
ふ御茶屋の跡ゆゑ茶屋村と号す

中田 江戸より日光山并奥羽の官道あり藤知文東山志上巻云

中田 古河まで一里十八町土井侯封内寺社八幡社 香取社
驛程見聞雜記上巻云中田宿の入口東の方に八幡香取兩社合
殿あり往來の鳥居より一町餘も入れば社あり神さびていと
尊一昔ハ川の北に在り一瀨 時宗 本願寺 萬福寺 淨土真宗
替りて今ハ爰に移すとあり 器 按に此處ふてまめ藥を賣る効あり
廻國雜記云中田といへる所ふて始めて富士を眺めて

このはのみちとおふたののをいふてみやこの人かさむ 道與准后

静女舞衣 中田宿光了寺藏ありこの寺原栗橋の南なる高柳村

ふ在りて高柳寺といへる頃静女を葬りてより什物とい爲り
なる閑窓瑣談卷一云武藏國栗橋宿より西方ふ入る事四五

町高柳村の内松永といふ處ふ杉あり昔よりしてこの杉を静

の塚と言傳ふ近頃中川君の立てさせ多ひ一碑あり静女塚と

記す云この説田ありてきこゆ 日光驛程見聞雜記上巻栗橋條

内宝治戸といふ所ふ静の墓印の杉の大木あり静御前義經の

迹を逐ひ此所ふ來り奥の高館ふて戦死すと聞て俄ふ病で死

六丈七尺張り十五間圍ニ文三尺今年五月關東の郡代中川飛驒

守賢を捐てその事を石に勒して樹下ふ立つとあり以上こハ

享和三年の事とぞかく二處ふ同人の墓あるハ一ハその侍女

琴柱の墓あるこの寺古ハ天台宗あり一ハ今ハ淨土真宗ふて

報恩寺末あり改宗の事静女舞衣縁起ふ建保年中宗祖親鸞上

淨土真宗光了寺と改号せり西願ハ後鳥羽院の北面土岐又太

郎國村の次男出家して權大僧都法印圓崇といふとへり

この舞衣の事縁起云後鳥羽院の御宇一歳大早魃して耕草連

枝も枯果國民の愁安からず貴僧を請ふ雨乞執行まませと

も一滴の潤を公卿詮義の上一百人の舞姬を集め神泉苑の

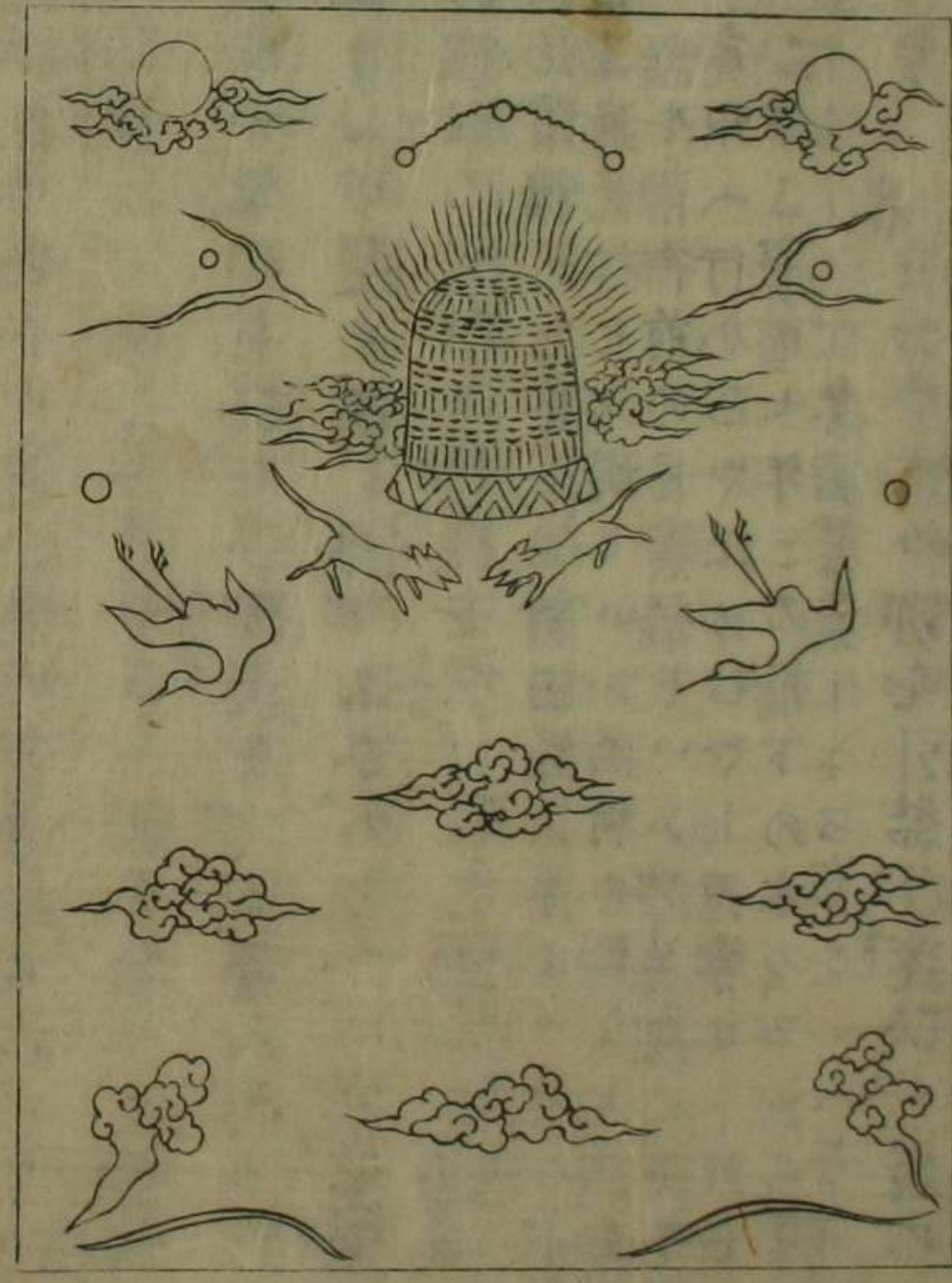
池ふて法樂の舞を舞ハせむふ九十九人まで舞ハれれども

静女舞衣圖

長二尺五寸

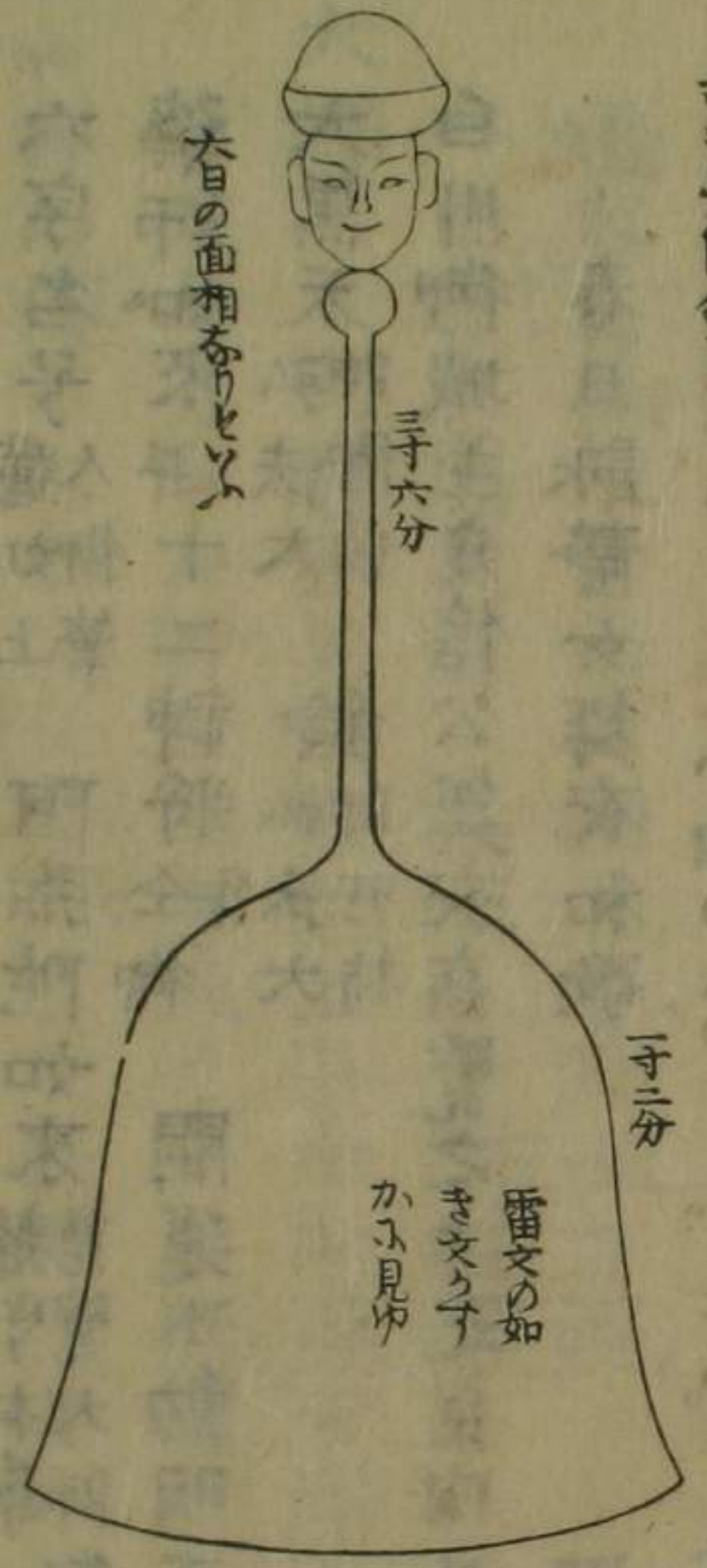
地黒く種々の糸にて文を繡せり

腰一尺五寸五分



弘法大師鈴圖

銅色甚古



寸二分

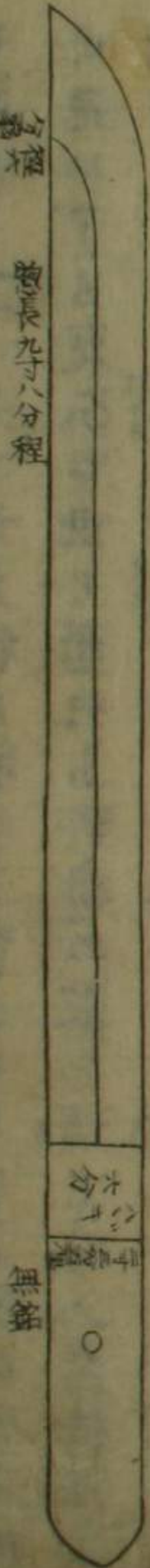
雷文の如
き文より
かゝ見ゆ

底徑 一寸七分五厘

大首の面相をりてん

静女懐劍

義經朝臣所賜



劍箱 長さ九寸八分程

義經朝臣鐙



川北

六

りひひいといと、さえ秋ハ物うき習ふりたる旅の疲と均
く思はずも定なき世と諸共小野邊の露と消えぬ入琴柱泪と
諸共小當寺小葬り一墓の印一本の杉を植ゑおく今ふこれ
を一本杉といふこの時守本尊并頂戴の舞衣義經公形見の懷
劍當寺小納り常什物と爲り畢ぬ

聖德太子像 宗祖親鸞
聖人御作

鑑 義經公奥州御下向の時預けり
即永錢一貫文御用立と傳ふ
法眼淨賀筆

十字名号 蓮坐御影繪 御銘御贊
覺如上人御作

六字名号 蓮如上 阿弥陀如來 靜守本尊
慈覺大師御作

藥師如來 并十二神將 開運不動明王 智證大師
師御作

大黒天 師御作 鈴 師弘法持
白川御城主定信公舞衣高覽之上近臣内外函被爲奉納者也

春日詠靜女舞衣和歌 源德純 新田氏

やまのはふちまふ袖のまつらふぞたふひく雲と雨とやある

題妓靜舞圖

大窪行

嬌容 曼娜太多情 柳弄 臂肢風力輕

一曲霓裳羽衣舞 誰知 中有鬪牆聲

大櫻 日光驛程見聞雜記上卷中田條云宿より東の方一里足り

ず大山といふ所ふ大光院といふ修驗の寺あり寺内小園三丈

程の櫻の大木あり單辨ふて香ありといふ

熊澤蕃山墓 大堤鮭延寺小在り先生名ハ伯繼字ハ了介 又了號

ハ蕃山又息遊軒といふ備前小事へて功績あり文學ハ人の知

る所ありその行狀ハ門人巨勢直幹の實記草加定環の行狀菱

川大觀の傳記ありといひて先哲像傳卷二小定環の行狀を

けり文中先生の功績をあげたるハ正保乙酉備前侯依京極

主膳再求以祿之于時先生歳二十七備前國政大革承應甲午備

之前中二州大飢窘迫及九萬人國者不知計爲乃委事於先生先

生出命施政。民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所。安遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。といへる。よて知るべし。後故ありて。備前を辭し。明石に在て。松平日州侯に事へ。侯の移封。不古河。不從。ひ上表。不因て罪を。幕府に獲。頼政。郭。不禁錮。して終る。元禄四年辛未八月十七日。壽七十三。鮭延寺に葬。り。儒禮を用てす。この寺ハ鮭延越前の舊臣主の爲に建つる所あり。鮭延ハ出羽の地名。越前ハ最上義光の舊臣事ハ常山記。談明良洪範等。不見え。さり。

三島大明神社 水海村に在り。廻國雜記云。下總國こ不りの山といへる。所ハ伊豆の三島を勸請し。奉りて大社ましく。にりかの別當の坊。不暫逗留し。けり。なる内。不哥ふと。度々いひす。てども。少々書し。おき。けり。たづね。來て。て。ふ。ふ。ま。の。お。か。な。を。お。も。ひ。ぞ。の。ふ。ほ。神。風。道。興。准。后。標。注。云。下。總。葛。飾。郡。郡。山。郷。水。海。村。に。在。り。三。島。大。明。神。社。領。五。石。

別當滿藏院古河よりハ東の方栗橋の北東に在る村あり。云々。按。后同時富士蟲初雁葛菽の吟。諸國圭齊録。下總國部新義真言のあり。この處の歌枕とす。べし。諸國圭齊録。下總國部新義真言の。中ハ五石。三島別當。葛飾郡郡山郷水海村。滿藏院と見え。さり。この餘曹洞宗。不十。法華宗。不五石。葛飾郡水海村。吉祥寺。二。石葛飾郡水海村。正藏寺を載せ。さり。日光驛程見聞雜記上卷中。田條云。又一里東。不水海村あり。昔。梁。田家の領せし。所あり。その村の名主。鰐口を所持す。是ハ三島。明。神へ寄進せし。物あり。文龜三年八月日。梁田右京亮平宗助と鑄。付。て。有。り。同。村。に。北。條。氏。直。が。虎。の。印。を。居。ゑ。る。旋。書。を。所。持。し。る。百。姓。あ。り。惣。て。こ。の。邊。に。梁。田。家。臣。下。の。子。孫。多。し。こ。の。所。中。田。を。の。名。高。き。繭。の。藥。を。賣。る。齋。藤。源。太。左。衛。門。と。先。祖。ハ。彼。の。家。の。老。あ。り。梁。田。ハ。五。十。万。石。程。領。せ。し。大。名。に。有。り。け。り。と。そ。本。注。按。不。右。京。亮。宗。助。ハ。康。正。の。頃。古。河。の。成。氏。に。屬。し。上。杉。と。戦。ひ。し。出。羽。守。が。子。孫。あ。る。べし。梁。田。ハ。關。宿。の。城。主。あ。り。云。五。村。島。下。總。國。葛。飾。郡。に。屬。す。南。ハ。權。現。堂。川。北。ハ。赤。堀。川。東。ハ。逆。

三島

八

川の間ふ在り又佐伯川を以て川妻と其の餘の十一村を分つ
これ古五村あり一が今かく分れ一あり古ハこの地下河邊
庄櫻井郷不屬すこの名の存せる櫻井新田村今江川新田と
いふこの島この島ふ小手指村あるを以て小手指差原の地とす
の内あり
る者ハ誤り見小手指差原の名ハ新葉集宗良親王歌の詞書ふも
義興義治の三將足利尊氏と戦ひ一高里四方の地をいふ
差原ハ北野物部天神より西北の方六七里四方の地をいふ
と見え武藏野地名考會卷十三小手指差原條もこの邊ありといふ
へり然る小江戸名所圖會卷十三小手指差原條もこの邊ありといふ
下練馬村小江戸の舊地ある由の土人の説と書言字考卷この島
一ふ小手指差原下總葛飾郡といへるハ同ド状の誤りありこの島
小ありと雖古河城の舊址ドヨブノ砂山富士見渡等の勝景あ
り又有土の寺多し

諸國圭齊録下總國部曹洞宗ふ二十石 山王山村 東昌寺十五石 東栗橋
院五石 同村 寶泉院まゝ五石新義真言 本栗橋村 寶藏院五石 同村 千手院五
石 小手指村 勝光院まゝ法華宗ふ十石 葛飾郡本栗橋 法定寺浄土宗ふ十石 本栗橋 隆岩

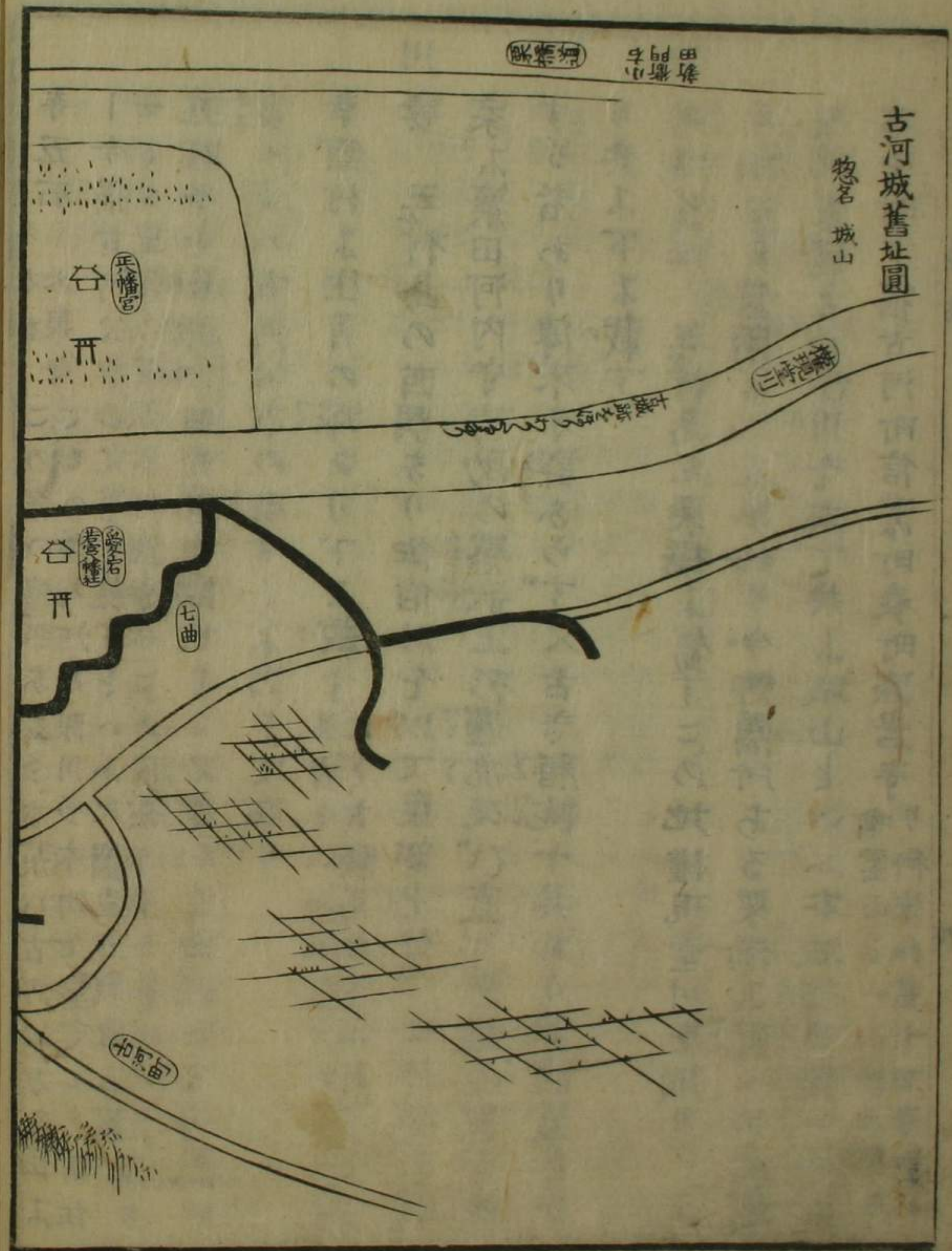
寺五石 冬木村 大泉寺この寺の檀那ある冬木某ハ古河公方の臣ふ
一今猶古河公方の後人江戸深川冬木所を壑てこふ住
せまる里見の臣冬木丹波守ハこの同族ある尋ねべり
五石本山修験橋西光院と識せりこの處かく由緒ある寺院の
多うるハ古河公方の座せし因りてあり

幸館村ふ生月の塚あり下ふ載すれど古駿馬の塚あるべし
川妻 五村島の西隅あり佐伯川を以て東部と分つこの村の舊
家不築田河内守持助の感狀上杉輝虎及び直江兼續の書を藏
する者あり傳來未詳からず又古き膳枕十具あり傳説最奇か
り共ふ下ふ載す

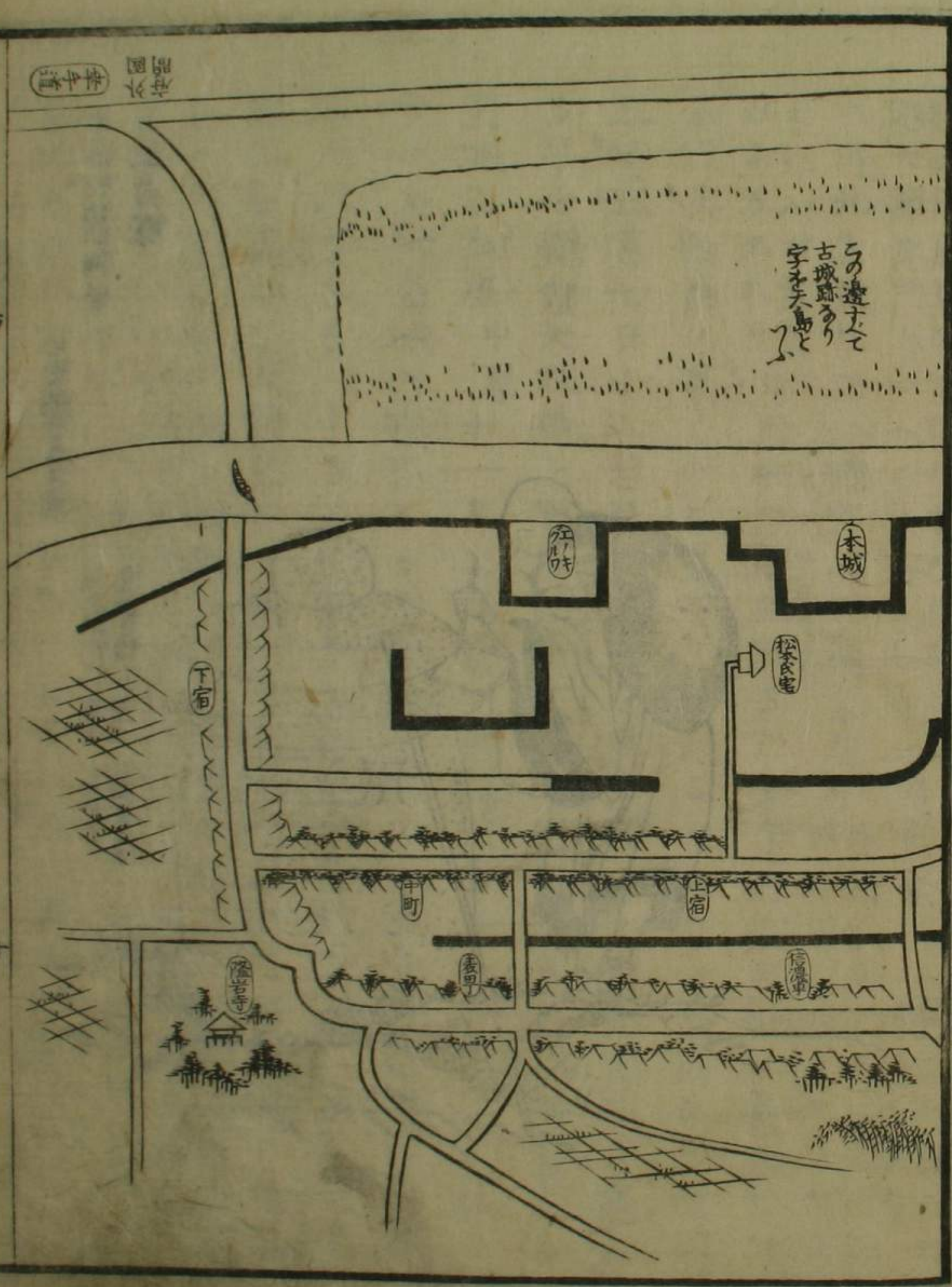
古河城舊址 五村島元栗橋ふ屬すこの地權現堂川を掘りし
り城址も栗橋と二ふかれり今御關所ある栗橋ふ對へて此處
を元栗橋といひ川を夾て共ふ城山といふ本城榎曲輪七曲上
宿中町下宿古河町信濃町表町隆岩寺 嚙雲山といふ浄土宗あり
御朱印高十石寺號ハ

古河城舊址圖
惣名 城山

田新町
新町



古河城跡
宇を大馬と



古河城跡
宇を大馬と

幸館村藝師堂
生月塚

元栗橋隆岩寺領

物置四尺四寸五分 高三尺寸
笠石前幅一尺九寸 奥行一尺六寸



岡崎信康君の法號喚雲院殿隆岩超あま愛宕若宮八幡社七曲の内
 越大禪定門といへるふとるといふハ川北ふ在り正八幡宮ハ川南ふ在り外國府間と小右衛門新
 といふ古河ふこの城の起立詳さしありず今の古河城ハ長祿元年
 由ある名ありこの城の築きく所ありさてそれより七十年前ある至徳
 三年五月七日小山若丸若丸官方と爲りて小山庄祇園城籠れ
 る事を鎌倉大双紙上巻まろ記して鎌倉殿ハ七月二日御發つ向古
 河城ふ御座中畧十一月ふ鎌倉へ御歸陣きありといへりされハ
 今いふ御番城さひの類さひあるうさる因ちかふ由りて成氏朝臣とこの邊
 不止とれるあるべしさて永享十二年結城合戦の時結城方より
 野田右馬助を大将として矢部大炊助以下古河城を繕つくて楯籠
 ると同書不見ゆ接野田ハ下野國野田郡の地名あり嘉慶元
 年丁卯五月十三日古河住人野田右馬助と同
 書不記せるハそこよその明年ある嘉吉元年四月十六日結城
 落城の下の文不同十七日古川城を北攻へき由相觸れりる

の終なき言はば中一陽陳ふ体行る
今合内のと志堪くの善事の合
中いし所の柔ふの中合の核の事
父子の志の元の從の後の事のありの事のあり
誠の中の法の軍の旨の去の中の金の道の洋の為
るの事のありの父子の人の教の事のあり
是の中の由の地の誠の行の事のありの人の教の事のあり
在の道の誠の法の多の事のありの一の志の事のあり
用の事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり
之の事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり
浪の事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり
わの事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり
誦の事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり
九の事のありの事のありの事のありの事のありの事のあり

去々々々
蓮花集

槐系原古版

乃所著法古字種所記抄
正筆教書之書
多々々々 圓者中
法合更々々々
つひに書し法々義重々々

培月 仰 初 張 之 以 付 系
多 母 心 心 名 在 之 表 物 在 也
海 國 之 一 二 戶 動 之 象 亦 終
法 陳 之 思 之 終 亦 終
此 之 揚 利 水 付 之 終 也
之 之 之 之 之 之 之 也

世 心 變 之

七月廿二日

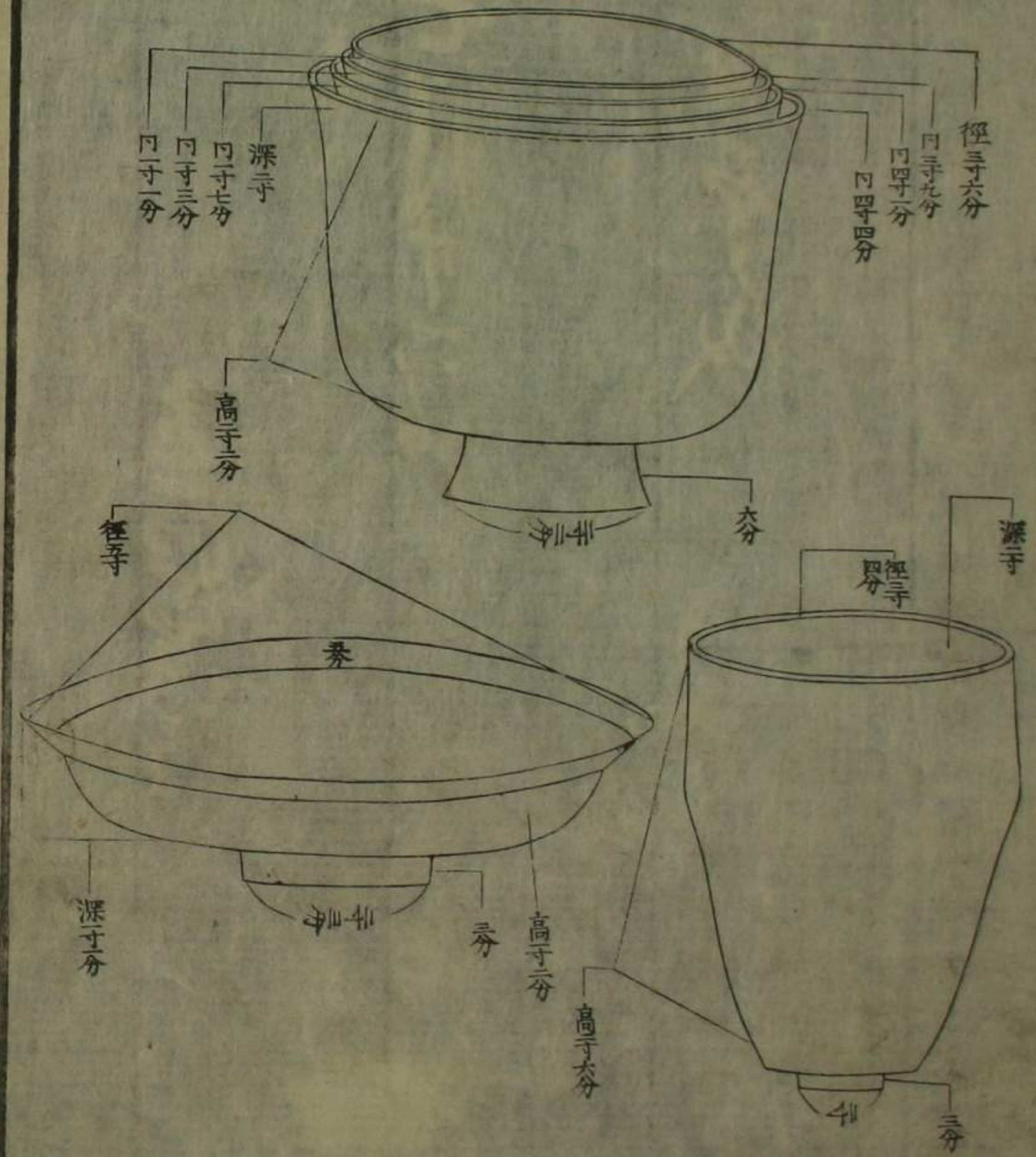
蘇 蘇

梶 原 殿

長 子 終

川妻隱里膳椀圖説

圖する所ハ下總國葛飾郡川妻村名主藤沼太郎兵衛家藏あり昔藤沼氏野州河合里より來りてこの村を開くといふ村中ハ隱里あり聲譽ある時ハそこより膳椀を借り來り事畢て、還す例あるが故ありて十具を遺一家不傳へさるが今猶一二を存すといふ朱漆古様頗奇品あり然れども神鬼の作不似ず傳へ聞く佐渡國雜太郡ニ岩不彈三郎狸ありて人ハ金を貸しにりそハ借るべき金の員數と還すべき日限を記し名印を押して置きぬれば翌日穴の口ハその金を置けりとぞ後ハ還さざる人多あり一ハ金を貸す事を止めて膳椀等を借しけるがこれさへ假さずあり不きといへりこの川妻のとざる類不や有りむ彈三郎狸の事ハ燕石雜志卷五及び諸國里人談等不載せて人の知る所あり



累年之志信於
水之龍城喜
海心藏於石
然之各國日
於流之於心
初志大

可為所公

壬午年 申 戌

六月廿五日

羽部大

處不野田右馬助以下の人々結城を根城とて楯籠りたるが
落城の由を聞て奇手の未近うざる以前不船不取乗り行方不
知落ち不れり矢部大炊助以下殘留りて野田讚岐守不誅と
いへりその古河といふハ古利根川不因れる名あるべしこの
正の頃不と有りしと見えて今の古河城修覆の間小笠原城天
信州侯權不移住せる事あり隆岩寺ハ其時の草創といふ今の
古河城ハ康正元年六月十六日京都將軍義政公今川範忠不命
鎌倉を破る不及て成氏ハ總州葛飾郡古河縣鴻巣といふ處
不權不屋形を立て關宿城不築田を籠め野田城不野田右馬助
を籠置といふ事鎌倉大双紙下巻不見ゆ日光驛程見聞雜記古
四五町不鴻巣といふ所あり古河公方成氏の御所跡この後成
とぞその名のこいひ傳ふ細不てその形も知れず
氏ハ武州國府不落ちそれより總州葛飾郡古河縣不落着敗軍
の士卒を集め下河邊城不籠り多ひると同書不いへり是今
の古河城ありそハ下河邊ハ古き庄名あるが成氏朝臣のこ、

不座せしより縣の大名を稱する事とありしあるべし按不永
成氏ノ移ラセ玉フハ故下河邊在司行平ガ館ト聞エシ古河城
ナリ其後城南鶴巢トイフ處ニ有御所作といへるハ前後の差
あり松本勘兵衛といふ人あり古より古城迹不居て其處の事を
掌れり城迹草地堤堀共六万坪外不田地十三町歩を有ちこ
りしといふ今ハ古不如くすとふむ

つがい不ハみやの乾何とあり古城山といひとそつふあり古城庵 松本可成

沙山 元栗橋の新田トヨブ不在り方二町許こ、不登りて一望
すれバ川流四面を圍匝し富士日光筑波の山々雲間不出沒し
て風景最佳し春夏の間雅客遊觀の處とす

富士見渡 江川より關宿向河岸不渡る處あり富士の眺望此處
を最勝とす

六國山東昌寺 山王村東昌寺不てハ山王山村といふ在り築田
河内守滿助の菩提寺あり禪宗

制札寫

條々

下徳國

東昌寺

一當寺同門前百姓等急度可還位事

一寺家門前不可傳之每田畑主毛不可妨事

一對寺中門前軍狼籍非分放於有之者可為一殘勿事

右若於遠犯軍志忽可法處嚴科志也

天正十八年六月 日

鐘銘

大日本下總州下河邊庄櫻井卿六國山東昌禪寺大鐘

願主 大旦那 築田河内守持助

時文明八年六月廿四日 住持毗丘即菴老納ち

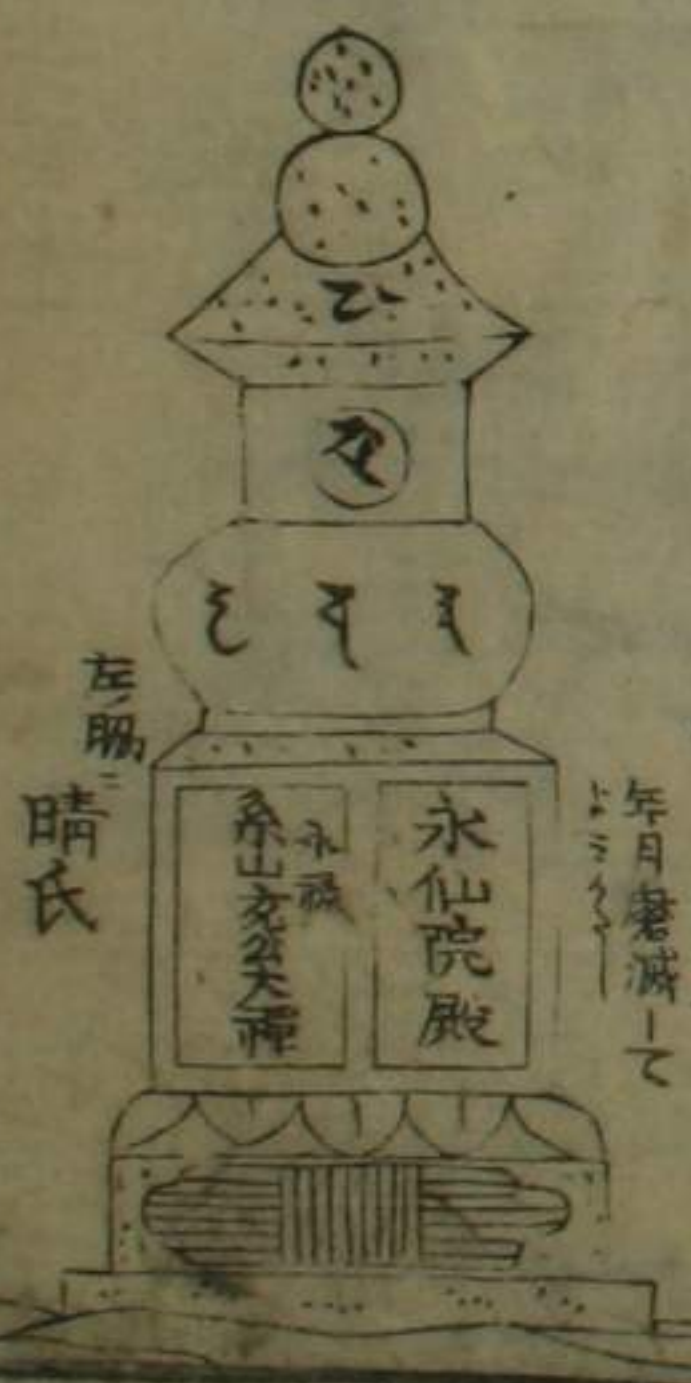
關宿城 此の城ハ古河公方の臣梁田氏の築く所あり梁田ハ從

來下野國人今ふと下野ふ梁田郡梁田村あり世々鎌倉公方に事へりりか

くて永享十年十一月一日築田河内守同出羽守等持氏卿の相
州大藏御所を留守し三浦介時高と戦ひて死すこの後嘉吉元
年四月十六日結城落城の時持氏卿の息春王安王の爲ふ築田
四郎ハ長尾因幡守討ふ此同出羽三郎ハ武田刑部少輔入道
討ふ此れりかくて寶徳元年九月九日春王の弟成氏朝臣關
東の都督と爲るふ至て結城の一黨と同く出頭の臣りりこの
後康正元年六月十六日京都將軍義政公の命ふ因て今川上總
介範忠鎌倉を破る此の時成氏朝臣ハ下總國葛飾郡古河縣鴻
巣ふ移りて關宿城ふ築田を籠めり由鎌倉大双紙下巻ふ見
ゆその明年正月十九日成氏朝臣の命ふ因て南圖書助等と同
く千葉介實胤の有る下總市川城を陥るこの頃築田河内守
ハ關宿より打て出て武州足立郡を過半押領し市川城をとる
と同書ふ見えりこの後築田中務大輔頻ふ上杉と和親の事

を勸むこの後變革千般あり弘治二年十二月十五日北條氏康より晴氏義氏兩君を關宿城に移し築田中務少輔政信をして守護せしめたる事關東古戦録卷六不見ゆこの後上杉輝虎を防ぐむとて加勢來りし結城六郎晴朝と永祿三年正月四日柳橋不於て誤て同士軍せし事同書卷九不見ゆかくて天正元年閏十一月十七日築田中務大輔政信同出羽守綱政佐竹義重不降るを以て北條氏政の兵不敗りれ佐竹の遊客と爲り城ハ北條家不屬せる事卷十九不見えりさて同十八年七月十一日小田原落城の後同八月九日領地拜領中畧下總國古河小笠原信濃守秀政同關宿松平三郎太郎康元同關宿内岡部次郎右衛門長盛一万二千石騰正内房總治亂記不見えり因州侯の墓碑ハ臺町ある觀照山宗榮寺不在當寺開基大興院殿前因州太守傑傳宗英大居從四位少將松平氏源康元墓行年五十四日と鐫り背面不爲當寺康元之墓草創年來而自破壊于時明和三丙戌歲八月十

四日從五位下源朝臣松平久世家の領と爲りしハ安永三年因幡守康卿修補之とありりあり今不至るまで嗣封の君侯世德澤を布き多ひて萬民鼓腹し市鄽繁榮あり東不臺町南不江戸町内河岸元町内町あり内河岸の對岸ハ向河岸ありこの二處問屋船宿多く最繁華あり江戸不行く旅人舟ハ向河岸より出づ江樓不柳樽を開き江岸不柳枝を折るその景況喻ふる不物あり
寺院ハ國花萬葉記卷十不松意寺洞家關宿在寺領廿石と見え諸國圭齋録下總國新義眞言部不十五石葛飾郡關宿昌福寺と見ゆ
古河晴氏朝臣墓 宗榮寺後の園中不在 高五尺許土人字して御所卵塔といふ晴氏朝臣ハ永祿三年五月廿七日卒を法號ハ永仙院殿系山道統あり





寄生
杉樹

川南

三十二



蛇
柳

大柳 關宿城東半里許葦場といふ處不在り故に葦場の大柳といふ中利根川より三四十間南方堤の内園の中あり廿年前ハ枝の下一丈許ありといふ今ハ草地と爲れり大枝三不分ウレ各太三四圍南北延長十四五間許南の枝不朴樹の寄生あり大四尺許その本幹の蟠る不因て命にて蛇柳といふ一奇事あり時としてこの柳川北不見えて夜行の舟不方向を失ハ一む此蓋層樓の類不して川北の空氣不映ずる者あり是を以てまゝ妖柳といふ

堀割 關宿の邊ハ卑溼不して水患多一故不嘉永の初領主より命して城東ある桐作木間瀬舟形木崎等の村々六里の間不水道を作り水堀より利根川不落一永く水患無から一む民甚これ不頼るこの桐作不眼科醫鳳梧あり畫を好む
春候、此交者、癖、舞揚、つけ、けて、そろ、この、むき、ハ、ぬ、う、こ、づ、けて、ま、ひ、あ、がる

これハツケタゲといひて古き相歌の由鳳梧この邊の事とも談る因不言へり

お、腹くつてう明神 水堀村不在り傳聞往年三月初午の日利根川洪水不て大なる木の方不して中不穴あきさるが流來り一を朝艸刈る者共これを上レむと爲一うと重さ白の如く不して揚りす乃繩不て柳不敷置村人を聚め各飽食せ一め同音不オ、ハラクチイナエンサラハウと囃一あがりこれを引揚不て産神不祭れり今もその例不因て毎年當日右の木を神輿と一村中の新夫不昇か一む利根川の畔不十間四面の池あり祭の前日その池泥をとりて周不置一む而當日神輿を池中不昇入る、不村人池周不羣集一同音不オ、ハラクツテウエンガンバウイ、ツモカウナラヨオカンベエと囃一つ、泥を池より上りむとする人不も神輿不も擲ちてあけさてねバ困

ドをてゝる時昇人の妻どもやびて漸ふ池より上がりせ身を
も神輿をも利根川ふて洗ひ妻のもとて來る新衣を著るこれ
より村人神輿を受取り元の如く社ふ収むこれ例祭ありとぞ
我慢 我慢とハ努力の義ふ轉言へりこの處水堀村の下ふて
衣川落合の衝なるからふ流頗急あるを舟子共聲を掛け今少
の間ぞ我慢々々と言ひより遂ふ名と爲りありこの處河
水最佳といふ

布施辨才天社 布施ハ江戸より松戸小金を経て水海道へのゆ
くてあり田中不孤山あり古ハ湖中の島ふりとぞ辨才天を祀
る東麓不窟あり別當を紅龍山松光院東海寺といふ眞言宗常
陸國大塚護持院末あり寺寶ふ蟠龍石あり此處ハ關東三辨天
の一ふして詣人羣集一戸頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺め
て頗勝景と稱する不足れり

縁起云昔大同二年七月七日の朝湖上ふ紅龍現れ一の塊を捧
げて島を作る天地震動一夜々光明あり天女里人の夢ふ入り
て但馬國朝來郡筒江郷より來れる事を告ぐ覺めて光を尋ね
窟ふ入れバ長三寸餘の尊像あり乃葦葦の小祠を建つその頃
弘法大師の經過ふ値ひてこの事を語る即大師嚮ふ筒江ふ於
て刻する所あり乃この寺を造り山を紅龍と命け里を天女の
利益ふ資りて布施と命かくて歸洛の後嵯峨帝ふ奏聞一弘
仁十四年田園を寄附一伽藍を造立す然るふ承平年中將門の
兵火ふ遇て衰廢す經基王武藏守と爲て箕田城ふ住する時此
處ふ來り忽互礫場松上の光を見狩衣の袖を刷ひ祈念せしう
ハ尊像即袖ふ移りふを奉持一天慶三年二月將門伏誅の後
この寺を再興一院を松光と命く今の本堂ハ享保の初法印秀
調が建つる所あり

川南

取意○按ふ經基王武藏守非ず介あり將
門記ふ武藏守與世王介源經基と見えり



布施
辨才天社



蟠龍石
 按小龍丈石の事、素園
 石譜卷三、魚籠石
 潭州湘鄉縣山之巖有
 石、中界間有石、中兩面
 魚龍形、作蛇之勢、鱗
 鬣爪牙角甲悉備、尤鳥
 奇異、といへり、されど
 り龍丈黒色、ある由り
 見えて、この石の青質
 白章あるみ比すれ、
 いさく下れり

大如圖
 實希世之珍
 祀爲守賀神



この社地ふ於て八月朔日毎年風祭相撲あり又巳年の三月ハ
 必開帳あり岡村の延命寺不埋める土偶及び駒塚不埋め
 三不見えて葬送の具
 あるべき由いへり

玉椿登とんえてや布施篋
 白菰と春八ねまれ布施の森

其角 慎我

日 天子社 相馬郡青山村不在り手賀沼の北ふ在土人ハ御天様
 といふ一奇事あり凶年の時社地不彫く芥を生じて近郷數
 百人の食不供す然るふ平年ハ少も無一と村長海老原氏話
 り又この社の周ふ多く生ひる篠竹を截れば血流出てその
 人不崇ありとて一も伐る者か海老原氏又一奇話をいへり
 四月十八日同村助の妻機を織り居むに井四五歳許の僧來
 てり水を乞ひて自家の井地を渡りて居むに井四五歳許の僧來
 隣より乞ひて與へ病不効眼病を傳けて去れりとの見
 清水とありて水を乞ふ者夥しく耳目を聳動するを以て官より
 高く清水とありて水を乞ふ者夥しく耳目を聳動するを以て官より

川南

字六

禁せりる猶水を盗む者断えずとあむ

御寮法性墓 青山村の東都部村大龍山正泉寺禪宗本尊の後、在り五輪の石塔あり法性ハ最明寺時頼の女あつてこの寺を建立し命けて法性寺といふ然るハ一夜この尼住持の夢に現れて在世の榮華の爲に手賀沼の毒蛇どくやと爲り十六の角を戴き八万四千の鱗を生じ三熟の苦を受くる由をいひ血盆經一千卷を讀誦して苦惱を救はむ事を請ふ覺めて後地藏講會を修せしうハ夢に八旬餘の老僧來り明朝手賀沼に行き見るべし龍宮に藏する血盆經を汝に與へむ墮獄の苦を免れむと思ふ女人ハこの經を受持すべしとて乃夢に覺ふは是地藏尊の化身ありとぞさて明旦手賀沼に詣りし水卒に動騰し白蓮花一莖涌出し中血盆經一部あり乃村を一部と命け山を大龍と命け寺號を正泉と改め題して日本最初女人成佛血盆經出

現第一道場といふ血盆經縁起取意

下利根川 蠶養川落口以下をいふ南ハ江藏地新田ありこの邊

より安食までを鯁魚の絶品とす

堀町 猿島郡の地關宿の對岸結城のゆくてふして繁昌の處

あり月々六載舟を江戸に出一以て行旅に便すこの下ふガツケといふ處あり下小橋と浦向に屬す近郷より薪をこゝに出一

以て中利根川に浮ぶ

女夫松 長谷村鶴戸沼の傍に在り結城のゆ香取社不在り圍一

文許その葉晝ハ常の如く夜ハ合して離れず故に又眠松といふこれを煎服すれば難産の患ありとて人々取貯ふこの香

取社より一町許北に乳房觀音あり

鶺鴒沼 又長須沼といふ源ハ涑谷一谷の邊より出屈曲三里

餘ふして小山に至り中利根川に落つこの處ハ嘉永四年の堀

歩掛 あれ浅瀬までさけをし
 る法かり船を浅瀬に繋ぎおき二
 人裸まで網を持ちへきき立つまで
 さけしり来る時河中に連たつを的
 として網を張り廻ら圍ひれを
 る網の幅五六尺長七六間より十三
 間に至る



割ありすべてこの邊の地勢を相馬日記卷三ある齋藤徳左衛
 門の談あひ不并せて考ふるふげ不往昔ハ蘆養川あし衣川飯沼の下流
 不連そりなり共不おほ大なる湖こゝろと爲り一を相馬偽都の要害えうがいと一利根
 川畔そり不ハ但矢作等の小地を存せるあるべい三河御風土記卷
 八年下總國葛飾郡矢作三万石を鳥居彦石衛門元忠あ知行せる
 由見ゆ然る不房總治亂記あ不上總の内あヒあて同矢作鳥居彦
 右衛門元忠あ四万石されあハ下出島の西不島廣山の故跡とて有
 とあハあその湖の畔あ不あて有りあれるあうあこの邊あ寺社の事諸國圭齊録
 下總國禪宗あ三石あ後嶋郡大谷口村妙覺院天台宗あ三
 石あ後嶋郡光作村あ三石あ後嶋郡本陽寺新義眞言あ十五
 石あ後嶋郡延命寺あ五石あ同宗妙光寺あ三石あ同知敏院あ三石あ
 石あ鷺明神同院あ五石あ後嶋郡歡喜寺あ五石あ同清光院あ三石あ
 石あ大圓坊五石あ後嶋郡長谷村あ三石あ後嶋郡大安寺あ二石あ
 三石あ若林村あ剛院時宗あ二石あ二斗あ後嶋郡觀音寺あ三石あ後嶋郡觀行院あ
 三石あ剛院時宗あ二石あ二斗あ後嶋郡觀音寺あ三石あ後嶋郡觀行院あ

川北

三六

嶋郡 大光坊村 十石 國玉大明神 後嶋郡 飯塚左京村 五石 八幡宮 長須坂村

治部丞あど見えり

保地沼 岡田郡 飯沼の下流あり末ハ二不分れ法師戸不奎りて

中利根川入るその下の方ある流平時ハ水無

衣川落口 相馬郡 大木村不在りこ、の川中不我慢といふ處あり

対岸ハ水堀村あり衣川本名ハ毛野川不て續日本紀卷廿九

天平寶字二年條常陸風土記新治郡注不見ゆ延喜兵部式不

野國衣川驛倭名鈔不下野國河内郡衣川と有るも專この川不

因りての名あり衣川歌枕名寄卷廿四不懐中抄を引ルりこの

國誌上卷相馬日記卷一 外廻國雜記不と歌ありあ不この川の事常陸

下野國志不と見えり 普門山禪福寺 筒戸村不在り諸國圭齊錄下總國禪宗不十三石

八斗余 相馬郡 筒戸村不在り諸國圭齊錄下總國禪宗不十三石

といふ不詣て、洪鐘の銘を讀む不大日本下總州相馬郡筒戸

村普門山禪福禪寺。万治三庚子天七月初三日。住持當山中興開

山大麟玄綱比丘尼銘焉。とあり本尊ハ平將門ヲ渴仰せし等身

の十一面觀音の木像ありと上總國の花岡といふ里より遷

しまゐらせとありといへり等身の由來ハ二中歴不見ゆ 歷第二

二造佛歷佛像寸法之條不五尺者弘法傳漢土時人長寺の傍不

也近代謂之等身と北條時鄰が標注不見之り 寺の傍不

最舊き石卒都婆あり鑿りたる字無ればその姓と名とを知

りず寺僧ハ相馬氏の墓標ありといふ又玉山宗雪慶長十六巳

二月今日と鑿りし五輪あり連歌師あどのヒ、不て身まされ

るふや

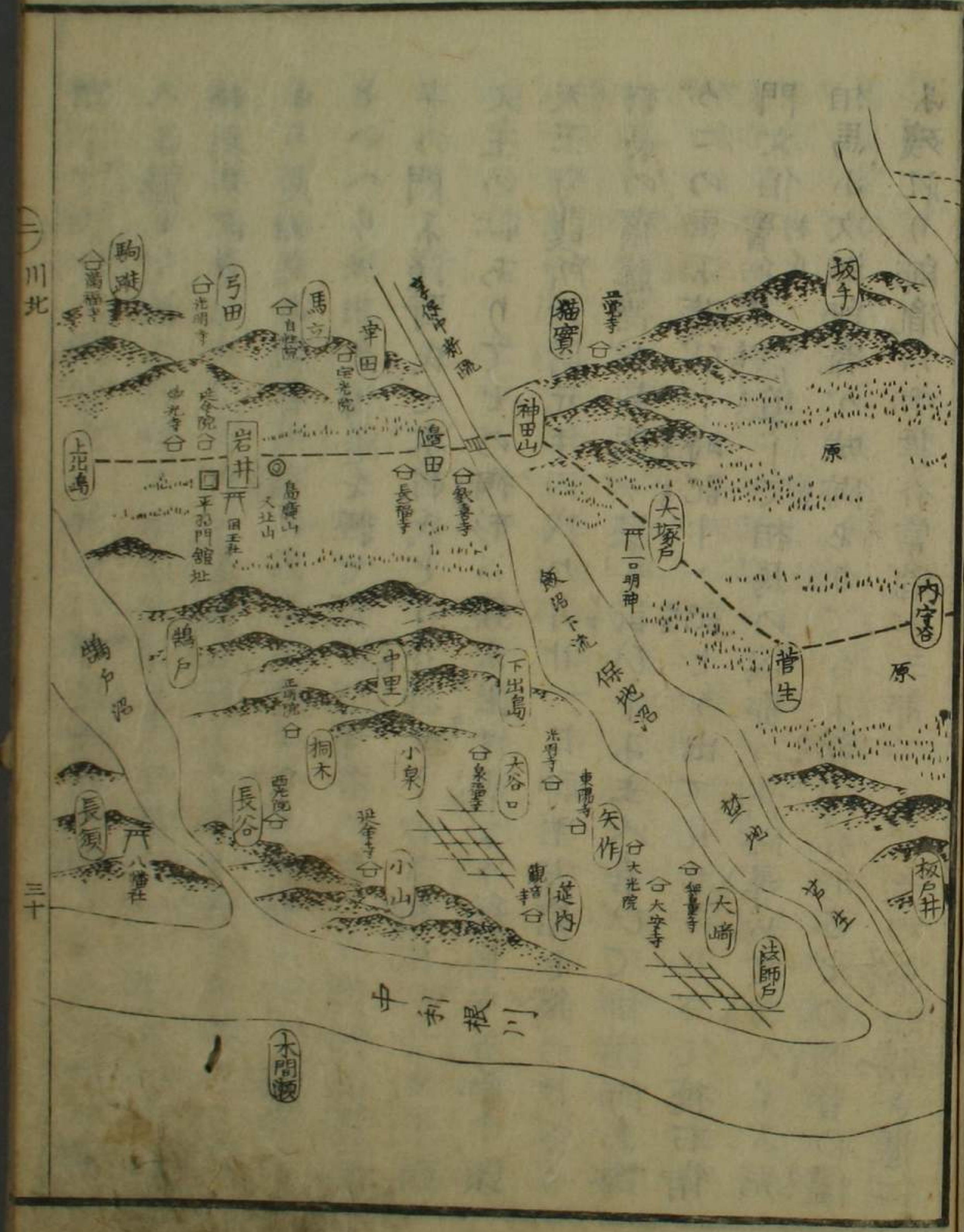
平將門舊址 平將門の事ハ將門記 大須本 大系圖扶桑畧記卷廿

五大鏡卷一外記日記卷一二舊本今昔物語卷廿五古事談源平

盛衰記卷廿三本朝文粹卷二元亨釋書卷十皇和真俗通卷十二

大日本史卷卅二日本外史卷一不見えて遍く人の知る所あり

平新皇將門城址圖



然して佐原の清宮氏多年この事迹を考へ勞くされハ今ハ彼人ヲ譲りて此ハ相馬日記を省畧して記す并せ考ふべし
相馬日記卷三云守谷野ハ最廣き野ふて目も遙不見かすむ許あり是相馬の偽都の構の内ふて兵士らがいむらひ跡ありといへり矢田部海道を経て行けば守谷の里あり德怡山長龍寺の門ハ淺野氏と木村氏とが花押せし古き制札あり又牛頭天王の社ありてその御形ハ鏡ふ坐す裏ふ下總國守谷卿牛頭天王守護所大同元年丙戌九月廿一日神主吉信と鑄つけさり村長の齋藤徳左衛門の家を訪ひし主人喜びて俳諧師鳥醉がこの里ハ遊びし時記し記しとう出て見せたりさて徳右衛門文伯醫師木村氏嚮導して相馬の偽都の舊跡尋めて分るる先相馬小次郎師胤が城跡ありて今ハ乾壕弁形あどの形昔の儘ハ残れり師胤ハ千葉介常胤が三郎子ふてその裔相續き應仁

年中までこの城主ありといへり按ふ相馬氏の没落ハこれ國眞壁郡下妻の多賀谷修理大夫高經グ小田天菴滅亡の虚不乗じ地を廣めむとて下總國岡田郡古間木城の渡部周防守元綱を攻めし事を常總軍記卷十二ハ記し相馬城方加勢の兵羽生式部石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐彈正添屋を以て相馬郡守谷筒戸の兩城主相馬左近大夫治胤を伐しめる事關東古戦録卷九ハ見ゆかくて明年七月十一日小田原落城の後佐倉東金等と一時ふ落去り同八月九日領地拜領下總國の内ハ同相馬菅沼山城守定後元和といふ年の頃土岐氏の君こふ住まれし上野國沼田城へ移らしてよりこの城遂ハ廢れぬとぞ島の中道を東へ廿町餘行けば大壕曳橋かどいふ處あり平臺といふハ最高き岡ふてこぞ將門が住みし所ある又眩く許の深き壑を渡りてハ幡廓ハ移る將門が齋き祭りし妙見八幡と申すがこふ鎮座しを今ハ山をり山の西林寺ハ移りまろりせりといふ山下文林寺ハ古くハ茶島山清淨光院といへりとぞ見ゆ諸國圭齊録下妙見八幡と申總國禪宗相馬郡ハ二十石西林寺と見之り

川北

す由ハ妙見菩薩と相殿ふ祭れるふヤ昔この文の上門が八幡の
陳宜を偽り事ありこの所より八千町の田面打越一奥
山一臺向地赤不け岡村がううふどいふ所々目路違ふぞ見
渡されたる齋藤氏語りぬく古ハ相馬の偽都の周ハ都て湖
湛へてまふき要害の地あり一を寛永といふ年の頃衣川の
流を南へ決りて数万頃の新田をバ開かれ一といへり今と猶
田の真中不池残りて蓮ふどの生ひるる多かり熟相馬と命
一名の所由を考ふるふ所の體淡海の中の一庭かれバ狹場と
いひむを音便ふさうまると轉一いふふるべ一按ふこの説
猿島と小島の義あるべし漸不水涸れ泥乾きて許多の村々を爲し長
洲等のミありか古ハ今相馬郡の地多かり猿島を爲し長
りるべしおさるか古ハ今相馬郡の地多かり猿島を爲し長
卷十の多賀谷高古の事ハ知り後世の書か猿島を爲し長
田郡を攻むる諸士の極め猿島勢人々大驚き岡田郡を
見えされどこの末に猿島の人々大驚き岡田郡を

うるれハ猿島と最危一加勢せすハ有るべし馬洗の横
瀬主膳菅生の石塚権兵衛内守谷の橋本石見野田の野田角牛
實珠花の平岩主水大山の一大山一學以下七餘騎を以て馳來る
と一へる野田寶珠花を山におきてハ相馬郡の地多かり猿島を爲し長
べし又長洲ハ古長須郷とてハ諸國圭齊録下總國淨
土宗後嶋郡ハ長須郷とてハ諸國圭齊録下總國淨
四石後嶋郡ハ長須郷とてハ諸國圭齊録下總國淨
原といへるハ田中の離島不て縦横不上道一里餘の廣野あり
昔淡海の廻れる時ハえといハぬル一島の島ありむとぞ思
ひやめる、今この野中を行く道をかうう海道とよべり卯
かううといふ名何とも心得がまきをよくおとへハ將門記
今昔物語ふと辛島と見え一をかううといハ説れるふて辛
島の廣江といへるもこの周の田とあり一所を指せるあり
この辛島廣き地不て古ハ郡の名不もよびたる常
陸介良兼將門を襲ひて下總國豊田郡栗栖院常御殿を燒
き一餘不將門を爲身病隱妻共宿於辛嶋郡常津江邊依有非
常之疑載妻子於船於廣河之江とハ一の蘆場を葦津ともいひる
さりて廣河江とハ馬郡大井津号爲京大津とあるもこの邊あるるか

三川北

三十三

くて天慶三年二月十三日貞盛秀卿が將門の宅を燒き一餘
新皇擬招弊敵等引率兵仗隱於辛嶋之廣江と有りこの時燒
れ岩井上見之跡と稱す者此營所ありさり相
馬郡事ある時廣山故跡といふ者此營所ありさり相
居と事ある時廣山故跡といふ者此營所ありさり相
の戦始且辛嶋郡之北山張陣相待矣といふ此ハ明
ひて敗死せる門上風不居勝ちて敵を逐ひ却て風下と爲り再
の事知るべしとの餘北清官氏を待つ又將門記古事談ふ
ハ島廣山と見ゆこれも廣き島山然よふべき事あり佛
島といふハ堀を廻りて構へ一所草木茂り暗がりておぞ
ま一き古墳あり中少許艸おひぬ所あるを強く踏めバ地ふ
響ありて聞こゆこれやこの兵器おとあま埋ま一が故ふそ
の鉄氣ふ因りて草と木とおひいでぬあるべし里人これを將
門が墳ありといへり佛島と名づけ一ハ傍ふ地藏の石像又ハ
何くれの佛の石像立てればあり坂を登りて高き岡ふ大日堂
あり古き松おど有りて眺望好しき所あり將門がうられ跡

ありといふ熟この堂の貌を見るふ古墳の上ふ建てたるあり
これ將門が骸を埋めむ所ふてかの佛嶋ハ伴類の屍ふや兵
具おど埋めたるべし米野井の桔梗が原といふハ將門が妾
桔梗の御前といふが殺されたる所ふてその墳あり今も桔梗
ハ有りおぐら花開く事おきハこの御前が怨ふ因れるありと
いへり海禪院といふも間近一そこハ將門が高野山の貌を摹
して先祖の墓を造り一所ありこの寺の新皇堂といふハ將門
が靈を祭りて國王明神と稱へり按ふ諸國圭齊録下總國禪
高野村海禪寺今日廻り見一相馬の偽都の體を思ふふ上道四
里許が間ふて湖の中島おれば上とおき要害の地おれば朝廷
ふ叛き奉り一ハ僅九年をうり一門悉亡びふき
つ波の風ふおれむ幸高の廣江をあせておとときをた 高田與清
按ふ相馬日記ふ相馬小次郎師胤ハ千葉介常胤が三郎子あり

和田村の由右衛門あるがこの二人の事ハ勸善録不載せり
そと勸善録ハさよてありぬ人をも載せざる請あれどこの二
人ハけ不載すべき績あれ
ハ引きて因ふ下不記す
勸善録中巻云下總國相馬郡岡村の林兵衛和田村の由右衛門
藤兵衛三左衛門など多く孝貞の友聚まりて廢田一町九段許
を開きりりその廢田不澁田鹿田などいふ名あり澁田とハ窪
き田不て水常不溢れ稻苗水の爲不腐れ廢るをいふ鹿田とハ
土質よろうらうず水も足りぬをいふとあむその里の佐兵衛
七郎兵衛中畧人名などさる廢田とさりけるを林兵衛由右衛門藤
兵衛三左衛門輩田主不力を合ハせて墾開き今ハ良田とあ
りて年ごとの貢米滞とこちる奉れりといへり
大鹿城址 天正年間小田天庵の麾下あり一鹿左衛門の居處
あり常總軍記卷十一云爰不下總國相馬郡小文間一色宮内ハ
小田の味方不て有り一がこの頃佐竹不降りて近郷を脅し手

を廣くせむと思ひ一がかねて中惡うりにれハ先大鹿不攻懸
て大鹿左衛門を亡不一かの世帯を押領せむとて二百餘騎に
て不意不大鹿へ押寄せり時一と大鹿左衛門ハ所勞不て居
さりける所不闘をあげ一ハ家子須川平治を呼び何者うよ
せつらむ思ふ不小文間の一色めあらめ憎き奴らふさりか
り我此體不てハ中々矢の一筋も射出難一足弱を片付にて
我ハ腹切るべ一汝宜く片付くべ一と江川一ハ須川表不走
出て家人を聚むる不漸雜人共不五十人許あり一ハ先奥方
を始女童を皆呼集め後の山傳一てかりき命を遁れ同所の弘
經寺へ隠一たり是大鹿が菩提寺ありかくて足弱を片付れ一
うハ今ハ心安一と須川を始切て出て散々不戦ふその隙不六
鹿左衛門心静不切腹すこの文の續ハ下の
接川北に大鹿の城址ハ弘經寺の三町ばかり南ある山上不在り山

川北

南の田園を城下といふ其處の田中不鹿塚とて有るハ由有り
げあり

大鹿山弘經寺 諸國圭齊録下總國浄土宗部云五石 相馬郡相馬 弘經寺

常總軍記卷十一云大鹿弘經寺ハ浄土宗あり下總國岡田郡飯沼弘經寺の隱居所ありといふ又結城ふも弘經寺といふ有り同宗あり中畧大鹿ハ十八檀林の外ふて百石御朱印あり權現様眞那板不御書下とあり因て今ふ眞那板御朱印といふ經寺といふ寺三宗常總ふ弘

大鹿山長禪寺 鹿島日記云近嶺德基と共ふ最高き石坂を登り

て大鹿山長禪寺ふ詣つこ、の杉利根川不臨きて西南の空造不富士峯のみさけのれとるえも言ひ難し寺ハ妙心寺派の禪宗不て文曆といふ年の頃織部時平てふ人金を施して建つとかむ時平が法名を記しとる位牌不大悲院殿花輪平公大禪定門と見ゆこの里ハ昔大鹿左衛門某が住ミ一岩の跡ありとぞ按ふ大鹿の城址ハ既ふ上不言へるが如し此處ハ岩の有り一あるべし城址ハ此處の西稍北ふ在りて十二三町を隔つ

さてハ麓ある取手宿ハそれふ因れる名あるべし中畧 近隣不

臺宿村あり取手宿より東不續きとり古き名ハ何といひにむ

今臺宿といふハ取手よりも高き所ふ在る宿あれハあるべし

臺ハタヒラの省謬 大鹿村

ある由下ふいへり 長禪寺と見

按ふ諸國圭齊録下總國禪宗部ふ五石三斗

ゆ境内不光音骨堂あり 寺寶ふ光音の 光音ハ此邊ふ四國八十

八ヶ所の靈場を摸し設けとる人ありそハ 臺宿村

大鹿山長禪寺 地藏堂 不動院

臺宿村 地藏堂 觀音堂 藥師堂

取手 西照寺 念佛堂 常圓寺

吉田村 嘉納院 本泉寺 地藏堂

同村 藥師堂 安養寺 大照寺

同村 成就院 地藏堂 福永寺

川北

三六

取手宿 江なり水戸より行くの官道よりて地名ハ上の山ハ大鹿
 氏の岩有り一不因れるなるべし此處の聞人澤近嶺の家ハ新
 町不在り油屋與兵衛といふその詠歌を伊能願則が撰ひ載せ
 るる香取四家集の末ハ清官秀堅がその小傳を擧げりその
 文ハ澤近嶺原姓谷澤 小字吉次郎又定次郎稱與兵衛號月舎晚
 號梧桐庵相馬郡取手驛人年甫二十八入村田春海之門與清清水
 濱臣等切磋磨礪其作歌雖好新古今集樣能占地歩不流纖巧中
 畧天保九年戊戌八月二十二日歿年五十所存有雜記二卷梧桐
 菴歌集一卷といへり詠歌多々これハ因ふ一首を擧ぐ
 護山禪師甲斐國不歸りける馬の餓ハ法華經を贈りてよめる
 かひくもの雲のあふふ君すまはまに彩りてを 澤近嶺
 因ふいふこの護山禪師ハ甲州惠林寺の隱居不て長禪寺小住
 道徳高き禪師ありなり一時近嶺が世ハ無一と言争
 ひけるをさらハ見ふ來ませといひひれハ村中の腕立する者
 を誘ひ連れて行きて物語りひつゝ禪師の教のまふ本堂ふ

臥しふりさて戒めたるハ丑時不佛前不磬の聲聞ゆべし
 れどひめ驚きそといひりハ不磬の聲せりこの時禪師法衣
 を著手不線香を持ちて衆人の中不近嶺を後不從ハし墓所
 不至り暫讀經一法衣の袖を裹げされハ屈まり居てそこより
 窺ひたる不黒子知れる家の女髪をハ島田といふ不結ひ柳絞
 の單衣不黒子知れる家の女髪をハ島田といふ不結ひ柳絞
 一居たり見ると魂消えて禪師ハ誦經して成佛人多くて誰
 物を言ハて死せるを百日誦經して成佛人多くて誰
 母の爲己追りて死せるを百日誦經して成佛人多くて誰
 せしが己追りて死せるを百日誦經して成佛人多くて誰
 知りたる事ハ日不あれるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰
 ありとあむ

この宿の本陣ハ赤野民部の後不て舊家あり庭ハ水戸景山老
 公の歌碑ありげ不御歌の如く利根川の渡船取手渡眼下不見
 不富士を雲端不望とて景色ハハむ方あり
 きてゆくさきのとりてのやハ思ふ方ハとくつきふたり 景山老公
 床不紙貼りて下方不纜不瀑布の圖かきさる上ハ御筆を添ぬ
 多ふこの御筆迹ハ襦袢
 して家寶と爲れり
 山びめの衣やさす春すきて夏きてふつる向ふの 景山老公

この家の後一の古道あり佐倉街道といふそハ常陸國筑波郡山王新田ふて鸞養川を渡り山王渡下總國相馬郡山王村ふ入り毛有を經山王道大鹿ふ至て守谷道と合一取手ふ入り此處を過ぎ牛頭天王社側よりオッホリふ出で利根川を渡り中峠村の内なる中峠といふ地ふ到り終ふ佐倉ふ赴くをいふ按中峠の峠を寺田德基が問ひさる高田與清が答へて相模國大住郡の轉圜村といふ有りそハ嶺あり上總國市原郡引田村て批野の轉圜村といふ有りそハ嶺あり上總國市原郡引田村記の中峠の説ハ國史を善く讀み子ふ選ふ四方を見渡せばよたやのひよさきふおのまきとくは流すといふ今も山名ふ呼びて吾が村ふ中峠といふ有りそハ嶺あり上總國市原郡引田村隣なる立野村ふ稻荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖を這ヒヨといふ野村ふ稻荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖を這この説げふ理あり

本多氏城址 井野村ふ在り本多作左衛門重次の城址あり治亂記天正十八年八月九日領地拜領上總部小井戸本多今も其作左衛門重次三千石と見えさるハ此の誤あるべし今も其の處を城内といふ鹿島日記云井野村ハ臺宿の東北の方に續

字あれバ舊き城の跡あるべし又花輪臺といふ所あり織部時平が法名を花輪禪定門といひしを思合ハするふ時平が棲所ありむ計り難し云云下ふ壇輪作りむ處又ハ武隈の北と北へど誤臺宿より西北ふ向て行けば左ふ井野天神社有り猶行けば右の御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といふ地有り左ふ昌松寺のさて本路歸りて左ふ普門院の故墟あり城内の東あり普門院ハ此處の大寺あり自燒して去りりて今も年ごと後今處を賜はるといふされども由緒あるを以て今も年ごと後今處を賜はるといふされども由緒あるを處對立す又本多家の香火院ハ昌松寺ふ隣り桑原村光明寺と三の隣村なる青柳の本願寺ありその上ハ城内あり西ふ米原地あり路を隔て、右ハ花輪臺あり猶西北ふ行けば山王渡ふ出づ

小堀河岸 井野新田の地ふして岡堰より鸞養川を堰き入れらる流を利根川不落す處あれハ然いへり鹿島日記ふ出づトハ井野新田ありといへるハ利根川ふ臨まると地ふして船宿稱呼ふつきて誤りさるあり

川北

三十九

五家皆寺田氏あり德基が家あり今水神を産神とす例祭六月
廿日夜ふ入りて神輿を船ふて利根川ふ浮べ流ふ隨て靜ふ下
るこれを御濱船ふハ幕を張り鉾を立て懸く挑燈を掛け笛大
鼓囃物の聲高欄の内ふ起るこの時後舟より烟火を擧ぐその
數甚多しこれを見る人兩岸ふ雲集し持連ぬる燈ハ月の如
く水中ふ倒映して金波を生じ傍涼風ふ暑を消し酒食の興を
添へて寶ふこの地の壯觀あり

第六天山

小文間村ふ在りて松樹茂りさる山あり天明年間神
道德次郎紫紬泰助おと言へる賊首黨を結びて此處ふ住めり
今も第六天社の西一段依き處ふ窟の迹ありといふ相馬口記
卷三云酒
詰村ふて水戸路を横さまふ經て用水ふ沿ひて下る馬手の方
の見やりある山ハ相馬郡小文間の第六天山といふこふ昔
ハ盗人のあまふ籠り居て往來の人を引剥おどせし
ふ今ハ適き大御惠ふ因りて然る煩も無しといへり
あるやいろふ小文間山末の松をさへうるむかへり

御墓松

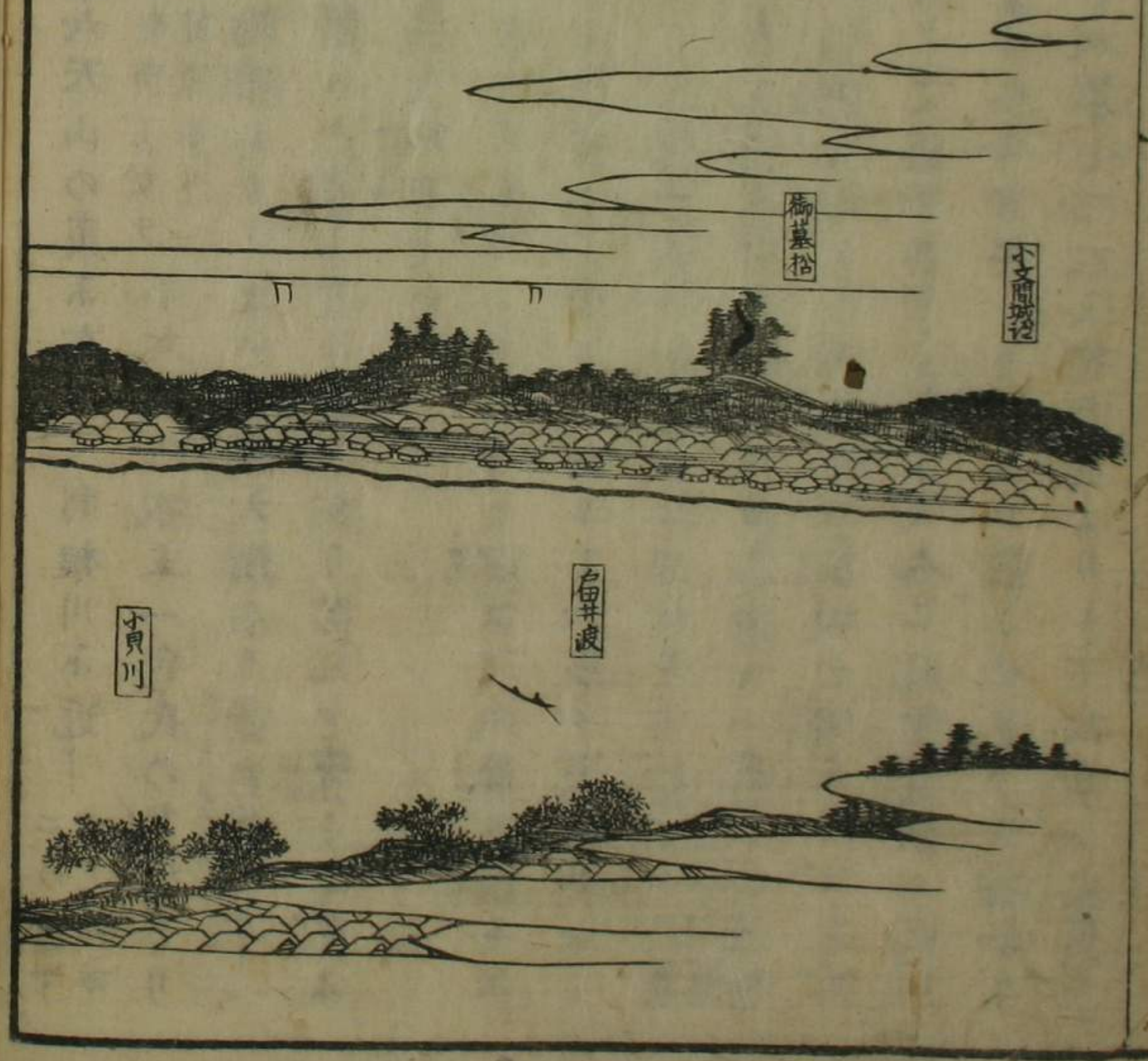
小文間第六天山の東ふ在りて利根川ふ近しこの邊す
べて西方
といひその山下を南子ガラ
といふ川の向ハ芝原あり 小文間の城主一色氏の墓標あり
古ハその下ふ五輪塔ありといふ頗大樹あり景色最佳し

一色氏城址

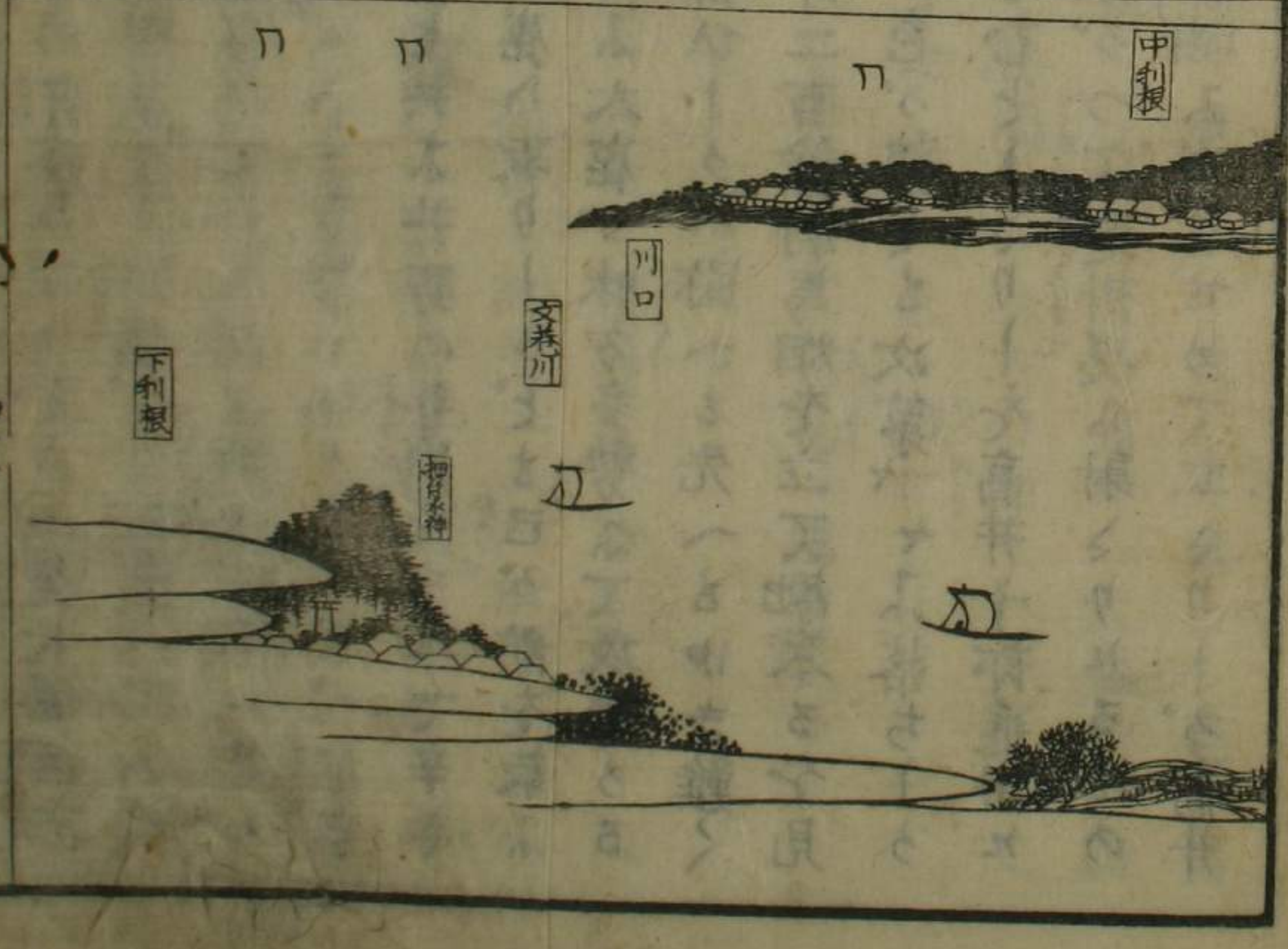
小文間の戸臺ふ近き處ふ在り詰丸と饗しき處ふ
天神社あり下の谷を城内といふ
常總軍記卷十一云一色爲濟まゝりといと悦びて大鹿が館ふ火
をかけ勝鬨あげて酒宴して居りたるふ大鹿が家人かぬて
左衛門が遺言しして聳の高井十郎ふこの由を告げしうハ高
井大ふ驚き又ハ怒て急ふ勢を集めたるふ常々一色ハ我慢押
柄ふして動れば鬪諍を好し者ふれば隣城と睦ららず又大
鹿ハ常ふ柔和ふして志平ありし者ふて人これを貴びたれば
憎き一色が仕業々今少早うむふハ討せまゝき物ある
を残念至極ある次第して大ふ怒り其よりして我れと集り

江原宿野櫻訪漁
 正消愁赤鯉千條
 網鮮鱸一寸鈞月
 盈烟柳浦舟整碧
 蘆洲好景何當比
 菴公赤墜遊
 昇吟孝

引渡
 魚の老や
 夏九月
 柳原



天誰くも...
 一...
 遊あり
 遊のほり
 勝花
 不二山



誤れるありといふ古歌

水草のかきまかせどもなぐれぬはふまき川といはるべし

國花萬葉集卷十下總國部云書卷川 名所不出按に名所景物不見古河渡と同一流あり水上あり云これハ何處あるう
知り難し猶考ふべし

水

神社 戸田井渡の東押村村ふ在りこの村桃園多し土人曰く

この村の一里許東ふ大平村ありそこふ住こるる人を尊びて
御大平様といふ一日此處ふ來りて魚を釣りぬるを水神甚怒
りうい潜牛ふ乗り來りて釣竿を奪ハむとせしハ甚驚きて側か
る藤蔓を投じたるふ牛の右角ふ係りたるを互ふ牽合ひたる
ふ終ふ角折れて別れりりとぞされハこの神體ハ右角ふき
潜牛ふ乗りたる木像あり別當徳満寺より出づる御影も同一
今も村人水神の嫌ひるふとて藤を用ゐず又大平村の人を嫌

ふといふその御大平様ハ今もその村ふて祭りて大平権現と
いふ

